IS〈インフィニットストラトス〉天使降臨

スーパーノヴァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ〈インフィニットストラトス〉天使降臨

【Ｎコード】

Ｎ３９５８Ｎ

【作者名】

スーパーノヴァ

【あらすじ】

４６７体のコアしか作らなかった篠ノ之束。だが、ある少年との出会いによりまた新たにコアを作ることを決意した。そして少年は出会った。異世界の意志を持ったＩＳに。少年とＩＳとの契約。束と少年、二人の想いが世界を変える。

第一話　ＩＳ

ＩＳ…正式名称、『インフィニットストラトス』。

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし、『制作者』の意図に反して宇宙進出は一向に進まず、結果スペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、いつしかそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた…所謂パワードスーツだ。

しかし、ＩＳには致命的な欠陥がある。

それは女性にしか反応しないということ。

そして十年前、ＩＳが世界に発表されて世界は一変した。

細かい事は原作でも書かれているので省くが、ＩＳが女性にしか反応しない乃ち『女性＝偉い』という構図が完成した。

また、既存の兵器はただの鉄クズと等しく、故に世界の軍事バランスは大きく傾いた。しかも、開発したのが日本人だった為日本はＩＳ技術を独占的に保有していた。それに、当時危機感を募らせた諸外国はＩＳ運用協定…通称『アラスカ協定』がまとめられた。

そして、ＩＳの生みの親である篠ノ之束はある人物と出会っていた。

第二話　過去　前（前書き）

投稿が遅れてすみません。
最近、夏休み課題や学校祭の準備などで忙しくて執筆が進みませんでした。
これからはもう少し時間が取れるようになるので週一投稿を目指します。

第二話　過去　前

蒼く澄み渡る、何処までも無限に続く天空。
眼下に見える雲の切れ間からは一切の人工物が見られない。
そう、ここは限られたものしか入ることを許されない世界。
空の女王（ウラヌスクイーン）が眠る世界。

その世界の所有者である空の女王は、膝を抱え込み長き時を眠っていた。
かつて小さな男の子と交わした約束を、天空（オシリス）の覇者と成りし運命を背負わされた少年との契約を果たすために。

トクン、トクン、トクン

そんな彼女が今、長きときの眠りから目覚めようとしている。
天空の覇者の覚醒の時が間近へと迫ったのだ。

「リアクター反応炉起動、コンデンサに電力供給開始、コンデンサ貯蔵完了まで、およそ……」

閉じられていた目が開き、中から真紅の瞳が現れる。

「各部センサー及びレーダー起動確認。システム上の異常は皆無。武器管制システム及び全武装オールグリーン」

彼女から次々と並べられる言葉。それは彼女の起動が順調に言っている証。

「空の女王（ウラヌスクイーン）、・・・・・・起動完了。貯蔵完了まで、残り・・・分」

今ここに空の女王が目覚めた。

彼の者は世界を渡る女王。彼の者は天空の女王。彼の者はこの宙の救世主也。

「刹那、あなたとした約束の時が来ました。とうとう、あなたとこの天空を飛べるのですね」

彼女の紅い瞳は次第に澄み渡る空の色へと変わっていく。その色は蒼穹。空の女王たる彼女に相応しい色。

「いきます、あなたと共に」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～十年前～

日本のある女性がＩＳを開発した。その女性の名前は篠ノ之束。

僕の姉さん―焔妙宮白は織斑千冬さんという人と共に第一世代ＩＳのテストパイロットに選ばれた。

姉さんのＩＳは桜花、千冬さんは白騎士。

テストパイロットに選ばれてから姉さんは帰りが遅くなるようになった。

僕は家で一人だった。

両親は幼い頃交通事故で死んだらしい。
だから姉さんは僕の姉兼母親として、いつも一緒にいてくれた。

そんな時だった。
姉さんはいつも身に着けていた腕輪を僕にくれた。
父さんと母さんが残した数少ないものの一つだそうだ。
ただ、この指輪をどのようにして手にいれたのかは、とうとう教えてくれなかったらしい。

「いいの？姉さん。父さんたちの遺品なんでしょう？」

「そうよ。けどね、刹くんが一人でいるのは嫌だから」

そう言って左手から外して渡してくれた腕輪。
その腕輪はどこか機械的だった。
全体的に直線的なフォルムで、はめ込まれている「蒼」「翠」「紅」「黄」の宝石が印象的だった。

「これを毎日身につけておいて。私の代わりだと思ってね」

「姉さんの代わりはいないよ。けど折角だから付けておくね」

姉さんと同じ左手に腕輪をつけると、姉さんは嬉しそうに笑って頭を撫でてくれた。

「それじゃあ、ねえさん出かけてくるから。遅くなるから先に寝ていいわ」

「分かった、行ってらっしゃい」

「行ってきます」

姉さを見送ってから、僕は顔の表情を削ぎ落した。

（寝よ）

それからベッドに潜り込み、睡魔に身を委ねた。

第二話　過去　前（後書き）

やっぱり一人称はなかなか難しいです。
また、大まかな話の概要は作れているのにそれを文字で表すことの難しさ、こんなに大変だとは思わなかったです。やっぱり慣れるには数をこなすしかないのでしょうか？

少し冒頭の部分を修正しました。

第三話　過去　後（前書き）

投稿がだいぶ遅れてすいません。

そして、遅れた割に短くまた、駄作ですがよろしくお願いします

第三話　過去　後

（ここはどこ）

青く澄み渡る空、吹き抜ける風。
海に身を任せているような感覚、まるで無重力状態。
けれど体は宙にあって、上下左右の方向感覚が狂っているかのようだ。
どうにか自分の中で下だと思う方に足を向ける。
しかし出来たのはそこまでで。
足を下に向けると目の前には蒼い髪に紅い瞳を持った女性がいた。
「お姉さんはだれ？ここはどこ？どうして空に浮かんでるの？」
混乱していた僕は考えることができず疑問に思ったことを次々と口に出していた。
「私の事を話す前に、まずは落ち着いてください。焦りや混乱は理解を妨げ誤解のもとになります」
「落ち着けって言われても、それに最後の方は何を言ってるのか」
どこか抑制された平坦な女性の声。
だけどその響きの中に優しい色を感じた。
「それなら深呼吸を。落ち着いてもらわなければ話が続けられませんので」

言われたとおりに深呼吸をする。
大きく息を吸って、吐いて。
吸って、吐いて。
二、三度やるとだんだんと落ち着いてくる。
それでもお姉さんが何を言いたいのか意味はわからないけど。

「落ち着きましたね。では先程のあなたからの質問に答えましょう」

「うん、お願い」

お姉さんの言ってることは難しい。
けど、なんとなく聞かなければと思った。

「私の名前は・・・・・・。秩序を司るもの。・・・で誕生した自律行動型戦闘兵器・・・・、こちらの世界で言うならば意志と肉体を持ったインフィニットストラトスです」

彼女の言葉に所々声が届かない部分が存在していた。彼女の口は確りと動いているのにだ。
何度思い出してみても聞こえない。

「この場所は私の能力の一つ・・・・・・で固定し、概念をつけて、一つの世界とした貴方の夢の中です」

彼女は僕が感じている言葉の空白に気づいていないかのように話を続ける。
いや、実際に気づいていないのだろう。
彼女の言動には一切の乱れが感じられない。

「最後の質問に関しては私にも説明できません。強いて言うのなら

ば夢だからでしょうか」

無表情の中にも僅かに困惑の色を浮かべる彼女。

「最後の質問に関しては置いておくことにして、これで貴方の先ほどした質問はすべて終えました。今度はこちらから幾つか質問と、私自身のこと、これからのこと、貴方のことについて説明したいのですが、よろしいですか？」

「うん、お願い」

この時から僕の異常が、開花してきたのだと思う。

この夢をみたのが十年前。

十年前…当時日本の女性が開発したＩＳのことが初めて話題に登り、白騎士事件で世間で騒がれていた頃。

姉さんはそのことに深く関わっているらしいけど、僕には一切話してくれなかった。

ＩＳについても、力についても、力を持つことの意味すら僕は何も知らなかった。

そんな僕が彼女の話を理解していたのだから。

理解だけでなく、記憶し、解析し、応用、発展ｅｔｃ

彼女の話を聞きながら、自分が知っているはずのない知識を吸収していた。

吸収し、活用して、問題点改善点まで考えていた。

だけど、その異常について、僕も彼女も、あの人に会うまで気付いていなかった。

僕の知識の異常性を、この世界に存在しないはずの知識を何故有しているのかを。

そして、ここまで思考し漸く俺は気づいた。
ここは、「今」の俺の夢の中だと。
そして、これは俺の記憶。彼女と出会った頃の、過去の記憶だと。
所々彼女の言葉が俺に聞こえないのは、まだ俺が彼女の主になっていないから。
記憶封印（プロテクト）がかけられているのだろう。自分の情報が誰かに盗まれないようにする為に。

そして、俺の意識はだんだんと再び暗闇へと落ちていった。
彼女は俺と契約を交わすために必ず現れるだろう。
その時彼女に相応しい主でいたい。
そんな決意を胸に秘めながら。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

空の女王（ウラヌスクイーン）と天空（オシリス）の覇者が目醒め、二人が出会いしとき
世界を闇へ誘う風が満ちるだろう
世界が闇に覆われし時、終焉（ジ・エンド）の眷属が目覚め、世界を喰らう
空の女王（ウラヌスクイーン）は自らの片割れを異界から呼び出す
天空（オシリス）の覇者は異界から光と風を操りし巫女を呼び寄せる
終焉（ジ・エンド）と空の英傑、神々の創世記時代より続く闘争
その後に暁はなく、黄昏しかない　空の英傑に魅入られし者、黄昏の中から開拓地（フロンティア）を見つけるだろう
彼らは世界のためには動かない　おのが内にある正義（まもるべきもの）の為に動くだろう
故に、彼らの前に立つことはまかりならぬ

紀元前３７１２　『空の救世主』より抜粋

第三話　過去　後（後書き）

暫く創作意欲がわかなくてこんなにも間があいてしまってすいません。

これからも、間が開くと思いますがどうぞよろしくお願いします。

第四話　模擬戦　前（前書き）

三ヶ月近く更新が滞ってしまい申し訳ありませんでした。
アニメを見てやる気が漲ってきたため、これから頑張ります。

第四話　模擬戦　前

＜ＳＩＤＥ：刹那＞

ちょっと薄暗い一室。そんじょそこらの無人島二つ分ぐらいの広さ。
ＩＳの模擬戦を行うのには十分余裕がある。
その中心で俺は立っていた。

『じゃあ、刹くん。そろそろ始めるよ。準備はいい？』

「はい、俺もこいつも何時でもいけます」

言葉と共に右腕を上げれば、そこには鈍く光る赤色のブレスレットが。
そこに嵌められている翡翠の宝石が一瞬輝く。
先ほど声をかけてきた声の主は篠ノ之束。
ＩＳの開発者にして生みの親。世界各国が血眼になって探している女性だ。
そんな彼女が何故、この場にいるのかといえば、俺と姉さん、千冬さんが頑張ったとだけ言っておく。
彼女は今、俺からＩＳの機能であるハイパーセンサーを使わなければ視認できないほど離れた場所で、データ収集とデータ調整を同時にやっている。

「いくら初舞台でデータ収集が目的とはいえ、手加減はしないぞ」

「それで十分ですよ、千冬さん。俺もアルトもそんな事は望んでいませんから」

〈その通りよ。手加減なんて必要ない〉

アルトーアルトアイゼンも気合十分そうだ。
こいつは俺の中に眠っている知識と、束さんとで作った新型ＩＳ。
別名、ＰＴ（パーソナルトルーパー）、その試作一号機。
アルトアイゼンはドイツ語で「古き鉄」という意味らしい。

「随分と自信があるようだな。もし期待外れだったら、訓練を倍にするぞ」

うわ、其れは困るな。今現在でもほんの少しきついのに……慣れって、怖いね。

「訓練をこれ以上増やされたら真面目に倒れそうなんで、遠慮させていただきます」

でもきっと密度が濃くなるんだろうな、勝っても負けても。
千冬さんが気に入らなければ。

『二人とも、ＩＳ展開してね』

束さんの一言と同時に俺と千冬さんがＩＳをそれぞれ展開した。
千冬さんが展開したＩＳは打鉄。
純国産の第二世代ＩＳ、それを束さんが千冬さん用に徹底的に魔改造したモノ。
拡張領域（パススロット）を減らし武装を右手の刀一本に絞り、代わりに運動性と機動性を底上げした機体。
本来武装を減らしてもメリットはないけど、千冬さんは第一回ＩＳ世界大会において雪片一本で総合優勝する実力者だ。

自身の愛機ではないと言っても、千冬さんにとっては十分お釣りが来る性能だ。

対する俺は全身が赤で彩られた装甲を身に纏っている。
特筆すべきはその両肩付近にあるコンテナと右手。
両肩付近の金属製のコンテナ、その中には「近距離指向性・近接戦闘用炸裂弾Ｍ１８０Ａ３」通称クレイモア。
直径１２ミリのビー玉サイズの球を大量に発射する。
その球は実弾、ビームと撃ち分け可能で、秒間７２発撃ち込むことが可能。
このコンテナの前部装甲を開放して放つため、射角が広く、球が広範囲に拡散するため離れた位置からでは牽制にもならず、発射された球のコントロールも一切聞かない。
また、球同士での跳弾の危険性もあり、混戦時にも使えない、一対多向きの兵装。
またまた、コンテナはビット兵器の有効性調査のために有線制御することが可能。
その為、コンテナにはスラスターがつけられており、その上破壊防止のため、対ビームコーティングされた物理装甲を三重にも備えており、楯や目眩まし、コンテナ自身による質量攻撃など使用方法は多岐に渡る。
そして、右手にある杭打ち機（リボルビングステーク）、通称パイルバンカー。またの名を盾殺し（シールドピアース）。
根元のところにリボルバー式の回転式薬室があり、目標に杭を突き立て火薬を激発しその勢いを使って貫く武装。
俗称通りシールドを打ち破るための兵装。また、杭にエネルギーを集中させ威力は低いがレーザーを放つことも出来る。
その他にも左腕には牽制に使う三連マシンキャノン、懐に入られたときまたは武装が破壊されたとき用の緊急時兵器ヒートホーンなど、接近戦に特化した機体だ。

これらの装備は拡張領域（パススロット）を大きく占めているため後付け装備（イコライザ）は少ないが、数点ではあるが付けることが出来る。

「随分と展開速度が早くなったもんだ、その点は褒めてやる」

「ありがとうございます」

〈練習したからね、毎日毎日〉

アルトアイゼンの、いやＩＳの展開速度をここまであげるのにどれだけ時間を費やしたことか。
普段の生活の時でも部分展開などを繰り返してきた成果がこれ、展開までの時間がわずか０．５秒。

『ほんと、刹くんの成長速度は、この天才の束ちゃんを以てしても予想ができなくて困るな～』

言葉とは裏腹に嬉しそうな束さん。
もしこの場に姉さんがいたら、個人間秘匿通信（プライベートチャンネル）で延々と聞かされることになっていただろう、弟自慢を。
しかも、何故か本人である俺が。

『うんうん、流石私だね。ここまで完璧に再現できるとは…いやはや思ってもみなかったよ』

〈そうね、刹那の知識から得た、刹那が描いた図面、刹那が創った技術それを活用する点に関しては…認めざる得ないわ〉

『私を舐めないことだね、技術と図面、いや知識さえあればこの完璧にして十全な篠ノ之束にかかれば、赤子の手をひねるより簡単だ

よ』

束さんとアルト、この二人はどうしてかよく争う。
アルトが言うには馬が合わないらしい。
束さんに関してはよくわからない。なんやら興味対象だけどうんちゃらかんちゃらで要領を得ないのだ。

「束さん、アルトとのじゃれ合いは後にしてください。千冬さんが呆れてます。」

呆れ顔をしている千冬さんからのアイコンタクトの支持で仕方なく二人の争いを仲裁する。
まず、年長者である束さん。

『な！？刹くん！！！これはじゃれ合いではなくてね、富士山より低く水たまりよりも浅い理由が……』

束さんとのチャンネルを閉じ、〈いい気味だわ、あの女〉とか漏らしてるアルトに意識を向ける。
これから千冬さんとの模擬戦だ。
束さんはあれでも仕事はちゃんとするのだが、アルトは結構根に持つタイプのようで、ここで確りとさせておかないと模擬戦に支障が出る。
実戦ではそんな泣き言は言えないが、今回は模擬戦。しかもアルトの微調整と総合評価を得るための物。
少しでも良い評価を取りたい。それにはアルトとの綿密な連携が必要不可欠なのだ。

「アルトもだ、いい加減束さんと口喧嘩するのはやめろ」

〈だって…「だっても何も無い。二人が仲良くしないなら一週間口きかないぞ」…!?分かったわ、分かったから……それだけは許して…〉

『刹くん!!私も謝るから、そんな事言わないで!』

向こうから強制的に繋げられた通信に必死の形相の束さんが映る。
その顔には焦りと悲しみが浮かんでいる。

「二人がつまらないことで喧嘩しないと、俺の名前に誓えるなら許してあげます」

『誓う、誓うよ。篠ノ之束は二度とアルトアイゼンたちと喧嘩しないって誓います!』

〈私も、私たちも誓うわ。マスターの名前にかけて〉

ふう、やっと収拾をつけれた。
これ以上長引くと千冬さんから雷が落ちそうだったからな。

「つまらない茶番は終わったか」

「はい、今丁度」

「ならいい。そろそろ、始めるぞ。馬鹿共のせいで時間が押されているからな」

千冬さんはそう言うと右手に持った刀を構える。
俺は腰を落とし両手を腰の位置で構える。
そして、クレイモアコンテナを体の正面に置く。

千冬さんは正眼の構え、俺はアルトでしか取らない突撃の型。

「ほう、よく考えたものだな」

「アルトの特性を考えるとどうしても防御が心持たないですから、自ずとこうなりました」

アルトの武装の関係上接近しなければ攻撃は届かない。
けどアルトは遠距離に対応するための装備や運動性はない。
ならば近づくまでどのようにしてダメージを最小限にするか。
そう考えているとき思いついたのがコンテナを利用すること。

「いいだろう、お前を今一人の戦士として認めてやる」

『いいの？ちーちゃん。予定ではもう少し後のはずだったんじゃ』

「その呼び方はやめろ。構わん、予定ではこの模擬戦の結果で決めるつもりだったが…こいつの、刹那の瞳をみて気持ちが変わった」

うわ、初めて千冬さんが俺のことまともに名前で読んだ。
いつも苗字の焔妙宮か、お前とかそう言うのばかりだったからな。
本当に認められたんだ。やばい、嬉しくて心が躍る。

『わあ、ちーちゃんが刹くんのこと名前で呼ぶなんて。珍しいこともあるもんだねえ』

「一人前として認めたんだ。なら苗字で呼ぶのは不自然だろ」

『そんな事言うなんて…やっぱり珍しい。もしかしてちーちゃん……刹くんにほ「黙れ。始めるから切るぞ」はいは～い』

うん？いま千冬さん、束さんと話しててみたいだけど、ぞうして顔が赤いんだ？
まあ、そんな些細な疑問はいいか。
「行くぞ刹那。お前の力見せてもらう」
「期待に応えてみせますよ」
そうして俺と千冬さんは動き出した。
＜ＳＩＤＥ　ＥＮＤ＞

第四話　模擬戦　前（後書き）

いま、刹那ラバーズのメンバーをどうしようかと迷っています。
希望がある人は意見をください。
反映できるかはわかりませんが、可能なかぎり反映させていきます
また誤字、脱字報告も待ってます。

第五話　模擬戦　後（前書き）

遅れてすいません。

またまた大分間が空いてしまいました。

戦闘描写は難しすぎる。

第五話　模擬戦　後

＜ＳＩＤＥ：刹那＞

俺は動き出すと同時に左腕を付きだした。
左腕に装備されている三連マシンキャノンが、こっちに向かってくる千冬さんに向けて鉄の弾をはき出す。

「はあっ！」

が、飛び出した弾丸は千冬さんが右手で持っている唯一の武器である刀で全て切り払った。

〈うそでしょ！弾丸を全て切り払うなんて！〉

「驚いている暇はないぞ！！」

俺がその事実にほんの僅かな時間意識を逸らした隙に、互いの有効攻撃範囲内へと入っていた。
千冬さんはそのまま加速で得たスピードを殺さずに刺突を放ってくる。
矛先は俺の胴。
俺は慌てて右半身を引き刺突を避けるが、完璧には避けられず胸部装甲を少しもってかれた。
千冬さんは俺が避けるやいなやすぐに刀を返し、右薙に打ち込んでくる。
俺は刺突を避けつつ呼び出（コール）しといたヒートホーンを逆手で持ちつつ受け止める。

受け止めた瞬間強烈な衝撃が腕に伝わってきた。
「やるようになったな。私の動きにその機体で付いてくるとはな」
「まだまだですね。ついてくだけで精一杯ですよ」
そう、この機体は近接専用だが小回りが効きにくいという欠点を持つ。
両肩付近にあるコンテナはその大きさと用途故に、密接している相手には使えない。
右手のステークは正面から打ち込まなければその意味をなさず、攻撃を受けようにも少しばかり装甲が心許無く使いたくない。
故にこの機体は敵に密接されると主な攻撃手段のほとんどが封じられてしまう。
対策として本来固定武装のヒートホーンを後付装備（イコライザ）として装備している。
また全ての武装に共通することにリーチが短い。
ステークは右腕とほぼ同じ、ヒートホーンは小太刀ほどの長さしかない。
刀とのリーチの差は壊滅的すぎる。
「やっぱり密接時の対処法がないのがきついな」
〈そうね、もう少し使い勝手のいい武器があればいいけど〉
「無い物ねだりはやめとごっ！！」
「戦闘中におしゃべりとは随分余裕だな」
迫り合いをしていた千冬さんから蹴りが放たれ、俺は其れを無防備

に受けてしまった。

「今回は模擬戦だがらいいものを…、実戦だと死ぬぞ」

その言葉と共に千冬さんからかなりの威圧を受ける。
其れは殺気、戦場では常に充満している死を運ぶ風。
其れを目の前の千冬さんが放っているという事実に、背中に冷や汗が流れる。

「取り敢えず、諸々は後にして模擬戦に集中するか」

〈そうしましょうか。では気を取り直して〉

機体の改善点や武装の改良点などの雑念を頭の隅に追いやり、俺は意識を集中する。
俺とアルトは一つの古い鉄。
古い鉄には鉄なりの通したい意地がある。

「〈どんな装甲だろうと、ただ撃ち貫くのみ！〉」

「ほう、よく言う。なら、その言葉現実にしてみせろ」

言うやいなや、千冬さんはまた俺の懐に一瞬で潜り込んできた。

（ちぃっ、早過ぎる。幾ら束さんが魔改造したからと言って打鉄でここまで動けるものか？）

そのまま千冬さんは斬り上げてくる。
俺は刀をヒートホーンで跳ね上げ、それで一瞬身体が死に体となった千冬さんに向けて右腕のステークを撃ち込む。

千冬さんは体を反らして避け、バク転の要領でサマーソルトを放ってくる。
俺は体を反らしつつ後退し、同時にコンテナを一つ千冬さんに向けて突撃させる。
空中では流石に踏ん張りが効かないらしく、千冬さんは刀で受けていたようだが２０メートルほど吹き飛んでいった。
俺はすぐに左腕を突き出しマシンキャノンを放つ。
未だ体勢を整えきれてない千冬さんは切り払うこともできず、シールドで受けるしかできなかった。
着弾により爆発が起き千冬さんの姿が爆煙で見えなくなる。
それを見て俺は嫌な予感を感じた。

〈刹那！〉

「分かってる！」

アルトの警告と同時に嫌な予感にしたがってその場を離れた。
ドゴンッ！という音と共に、先ほどまで俺のいた場所が大きく陥没した。
その中心には地面に刀を突き刺している千冬さんの姿。
千冬さんは刀を地面から抜き、俺に向かって斬り込んでくる。
右薙、袈裟切り、右切り上げ、唐竹。
次々に打ち込んでくる斬撃を俺はギリギリのところで避けていく。
千冬さんの攻撃は苛烈を極め、俺は反撃の糸口を掴めないでいる。

――――シールドエネルギー残量、残り２９７――――

（このままじゃあ、ジリ貧だな）

ハイパーセンサーから伝えられるシールドエネルギー残量を見ながら俺は考える。

今の状況から脱することの出来る一手を。
幾つもの考えの中からわずかでも可能性の高いものを選び出す。

（これしかないか）

「アルト！」

〈任せて！〉

アルトに声をかけた後、俺は目の前の千冬さんに集中する。
これは一か八かの大博打。
少しでもタイミングがずれれば失敗する。千冬さんに気づかれても失敗する。
僅かでも成功確率を上げるために、俺は千冬さんへと意識を向ける。
千冬さんは一瞬俺の一言に訝しんだが、何も起こらないとみるやまた、猛攻を仕掛けてきた。

＜ＳＩＤＥ：ＥＮＤ＞

＜ＳＩＤＥ：アルト＞

刹那の一言と共にその考えが私の中に流れこんでくる。
ハイパーセンサーによる思考伝達。
本来存在する人の意志とＩＳとの間にある僅かなタイムラグ。
其れをなくすために刹那が創りだした技術、小さな世界（イッツ・ア・スモールワールド）。
ＰＴシリーズにつけられたＡＩとの連携には欠かせない物。

これにより戦闘中、わざわざ言葉に出さずとも意思疎通ができ細かい連携ができる。
操縦者は目の前のことに集中でき、私たちＡＩは指示を仰がなくて済む。

小さな世界から伝えられた考えに従い、私はコンテナを動かす。
ちょうどコンテナと太陽が一直線に並ぶように。
あとはタイミングを合わせるだけ。
実体は持ってないけど私は固唾を飲んで見計らう。
僅かなサインも見逃さないように意識を張り巡らす。
そして

……今！！

＜ＳＩＤＥ：ＥＮＤ＞

＜ＳＩＤＥ：刹那＞

一体幾つ打ち合っただろうか。
俺を護る装甲にはところどころ傷が付いてる。
逆に千冬さんにはほとんど傷らしいものがない。
その顔には余裕の色も見て取れる。

（その顔を驚きで染めて見せる！アルトッ！！！）

決意と共にアルトに小さな世界（イッツ・ア・スモールワールド）で意思を伝える。
ほぼ同時に千冬さんに影がかかる。
その影はアルトが動かしていたコンテナ。
その身を重力に任せて落下していた。

「…ッ！？」

千冬さんは確認もせずにその場から離れた。
一瞬後には千冬さんがいた場所にコンテナが衝突した。
コンテナは地面を砕き粉塵を巻き上げる。
さらに粉塵の中から銀の弾が千冬さんに向けて粉塵を切り裂き向かっていく。

「なっ！！」

眼前に広がる銀弾に、流石の千冬さんも切り裂くのを諦めたのか、射程の外に向かって飛び込んでいった。
千冬さんが作らざる得なかった――――作らされた大きな隙。
それを作った俺が逃すはずがない。

【瞬時加速作動（イグニッションブースト）申請。申請受理。瞬時加速起動（イグニッションブースト）】

瞬時加速（イグニッションブースト）により加速した俺は千冬さんの懐に潜り込み、右手のステークを千冬さんの無防備な胴に向けて撃ち込む。

〈リボルビングステーク！〉

ステークは一切の妨害もなく千冬さんに直撃した。
――――かに見えた。
千冬さんは神がかり的な直感で俺のステークを避けていた。

俺は右腕が千冬さんの脇に挟み込まれ身動きがとれない。
「作戦としては十分な代物だ。私でなければ今ので絶対防御が働き、終わっていただろう」
〈そんなここまでして、届かないの〉
「なに、落ち込む必要はない。言っただろう？私でなければと」
〈そんなハズない！！タイミングも何もかも完璧だった〉
「これが現実だ。お前たちと比べて私のほうが経験が豊富なだけのこと」
そう、これで何もかも終わりだ。
これで決まった。
あとワンアクションでこの模擬戦は終わりだ。
「む、どうした刹那。先程から黙ったままだが」
そう、決まったんだ。
「あなたの負けですよ、千冬さん」

<SIDE：END>

第五話　模擬戦　後（後書き）

後半部分を修正しました。ちょっと前の終わり方だと色々不自然だったので。

誤字脱字などあったら報告ください。

第六話　模擬戦の反省と新技術開発

＜ＳＩＤＥ：千冬＞

ふふ、まさか私が負けるとはな、思ってもみなかった。
いくら私が愛機を使ってはいないとはいえ、これでもこの世界では敵なしだったのだが。
それがあいつに――――刹那に追いつかれてしまった。
きっとこれからの三年間で私を追い抜き、私を、私たちを護るというのだろうな。

「まあ、すぐには抜かせないがな」

「うん？千冬さん。今なにか言いましたか？」

「いや、何も言ってないが」

〈刹那、騙されちゃダメよ。千冬は今ね、あｎ…〉

「黙れ、馬鹿ルト」

〈千冬～～！馬鹿ルトはやめてって言ってるでしょ！！〉

「そうだったか。そうか、それは済まなかった。いずれ気をつけるとしよう」

危なかったな。

こんな戯言を言ったとバレたら恥ずかしすぎる。
刹那も調子づくしな。
こいつはまだまだ伸びる。
こんな所で慢心や驕りで堕ちてもらっても困る。
私の背中を預けられるたった一人の男だからな。

「ちーーちゃ～～～～～～～～～～～～～～～～ん！！せーつく～～～～～～～～～～～～ん！！！」

・・・・・は！？
今私は何を考えていた。
いや、今は考えている時ではないな。

閑話休題

さっきの間抜けな声と、すどどど・・・・・！という足音の正体は、ＩＳのハイパセンサーを使わなければ知覚できないほど離れたところで、私たちの模擬戦を記録していた束だ。
まだ、模擬戦が終わってから３分も経っていない。
それなのにこれほど早く来れるということは

「また新型のなんかを開発したんだろうな。はあ」

〈苦労してるのね〉

「ああ、だが十年来の幼なじみだからな。無視するわけにも、な」

アルト――――本来は刹那しか呼んでほしくないらしい、特別に私

と束、白も許された――――と束のことで共感を得ていると、ようやっと束は私たちの前に到着した。

「すごい！すごいよ！！もう言葉では言い表せないほど、束さんは興奮しちゃったね。まだ3週間しか経ってないのにあの動きをする刹くん、それに合わせるアルト、そんな刹くんに遅れを取らないちーちゃん！！もうねもうね、束さんは興奮しすぎておかしくなっちゃう！！！それにそれに、刹くんとアルトのあの息のあった動き。まるで互いの意思が通じてるみたいだったよ。これぞ正に阿吽の呼吸、以心伝心ってやつなのか！いいないいな、私も刹くんとそんな関係になりたい！！」

息をつく間もなくまるで、ではなく正にマシンガンの如き速さで束は言葉を発する。

途中で自分の欲望も漏らしてたみたいだが。

がんっ！

「うるさい、殴るぞ」

「う～殴ってから言うなんて。ちーちゃんの愛は激しい。それにいくら嫉妬「もう一発逝くか」したか・・・・・・ごめんなさい」

うむ、これで漸く静かになったな。

「それで、お前からみて刹那たちはどうだ」

「うん、まったくもって問題ナッシング。というよりむしろ私の予想の斜め上を軽く飛び抜けて言った感じだよ。特に、最後の攻防あたりでね」

やはり束もそう思っているか。

「そういうちーちゃんはどう思う？」

「私から見ても合格だ。私は今回負けるつもりはなかった、だが結果は私の負け。認めない理由のほうがないな」

自他共に認められている世界トップクラスの私に黒星をつけたんだ。
刹那は私と同じレベルに立ったも同然。
実力的には私と同格、戦闘センスは私以上、潜在能力は未知数。
これで不合格というのなら世のすべてのＩＳ操縦者は私も含め赤子同然だな。

「ということだ。刹那、アルト」

「はい」〈はい〉

「お前たちは今日、私という壁を乗り越えた。故に私からお前たちに言えることは一つ。慢心を捨てろ、驕りを捨てろ。そして求めろ、勝利を。”求めよ、さらば与えられん”この言葉心に刻んでおけ」

「はい！」〈はい！〉

「なら私からは以上だ」

「はいは～い、次は束さんだよ～」

はあ～、またか。
束と刹那の話は専門的すぎて敵わん。

私にはすこしばかり理解しかねる。
それでも刹那が楽しいなら構わないと思える自分が不思議だ。
まあ、束との会話でというのが癪に障るが、な。

＜ＳＩＤＥ：ＥＮＤ＞

＜ＳＩＤＥ：束＞

「刹くんいきなりで悪いけど、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）とＢＴ兵器の複合型、無線誘導端末”ドラグーン”の調子はどう？」

「結構いい感じですよ。俺もアルトも扱いに慣れてきて、今回みたいに応用を利かせることも出来るようになったし。ただ」

やっぱり刹くんはすごいね。
使い始めて僅か一週間でドラグーンをここまで使って応用までするなんて。

「ただ？」

「アルトで使う場合コンテナにもうちょっと武装関係が欲しいかなって」

〈コンテナでの質量攻撃とクレイモア掃射だけだと、戦術がパターン化しちゃうの〉

「それにアルトの後付装備（イコライザ）に中・遠距離武装を頼るからタイムラグがあって、千冬さんレベルだと呼び出（コール）して展開（オープン）するまでが大変で」

刹くんの話を新型移動ラボ”吾輩は猫である（名前はまだ無い）”でまとめつつ、指摘された点についての改良案を作り出す。
難しいようだけど私にとってこれは十一時のお夜食前の話だよ。
やろうと思えばテレビを見つつ本を読み、小説を書きつつ歌を歌い、ダンスしながら音楽を聞くのを同時にやることも出来るのだ。どうだすごいだろう。
おっと思考がどっか逝くとこだった。
アルトのコンテナに武装の追加かあ、どうしよ。
変に取り付けるとそれが壊れたときコンテナも誘爆しそうだしなあ。
まずは刹くんの意見を聞いてみよっと。
刹くんの閃きに束さんはとても興味津々なんだよ

「刹くんはどういう武装が欲しいの？」

「うーん、誘爆の危険性を考えると実弾系は外して、ビーム兵器もジェネレーター狙われると厄介だし・・・・・・」

〈それにコンテナの操作性も考えないと。変にバランスを変えて動きがおかしくなるのは嫌だし〉

「なら可変ウイング付けてみる？ここをこうすればペイロードが増やせて、誘爆しないように切り離しもできるしコンテナの機動性も上げられる」

「そうするとコンテナでの防御が出来なくなるし、燃費がだいぶ悪くなる。それならいっそクレイモアだけでなく他の武装も入れるとかのほうがいいような」

「ちょっと厳しいね。コンテナの内部機構を新しくしないといけな

いからね」

〈じゃあ、これは・・・・・・・・・〉

・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・

・・

十五分後

「あ」

「うん？」

「そうじゃなくて思いついたんですよ。今までの問題点をすべてクリアできるモノが」

いままでいろいろ考えてみたんだ。
コンテナを新規につくるとか、数を増やすとか、いっその事ＡＩ増やしてとか無人兵器とか。
私たちの思考がレッドラインを超えそうになるとちーちゃんの一撃が落ちたけど、それでもいい案が出なくて。
そろそろ妥協しようかなって時に刹くんの今の発言。
もしかしてもしかすると刹くんはなにか閃いたのかな、すごくドキドキするよ。

「アルト、エネルギーの武器使用時の使用量とそのときの変換効率、それにシールドエネルギーに使われてでた余剰エネルギーの放出される量に関するデータを出してくれる？」

〈分かった、ちょっと待って・・・・・・・・・だすよ〉

刹くんと私の間に数枚の空間ディスプレイが表示される。
そこには刹くんが指示したデータが映し出されていて、それを見て刹くんはなにか考えをまとめてるみたいだった。

「使用量が…の時、変換効率は…％であるから・・・・・・、ダメージを…受けたとすると、……だけ使われて・・・・・・余剰エネルギーは…、ならこの理論でいけば・・・・・」

私のことそっちのけに考え込んでる刹くんにちょっと不満を持っちゃうけど、その不満以上に刹くんが考える新たなシステムが気になってしょうがない。
ここまで私の興味をひくなんて、さすがだね。
その才能に私も嫉妬しちゃうよ」

「おまえが言うな、馬鹿者」

「えへへ、怒られちった。けどね、自称他称天才の束さんを以てしても、刹くんに勝てないって思っちゃうんだよ」

「珍しいな。お前が負けを認めるなんて」

「そうだよね、私もそう思う。確かにＩＳに関しての技術や知識は私が断然有利。なんせ私はマザーだし」

そう、ＩＳに関しては刹くんに負ける要素は一切無い。
けどそれ以外では刹くんのほうが上なんだ。
知識の量・質・種類、知識の応用、規定概念の破壊ｅｔｃ
刹くんは根っからの研究者気質なんだよ。
”これしかない”から”これもある”に変える天才。

「けど刹くんは私が十年以上掛けてきたのを、たった五年で追いついてみせたからね」

「そう、だな。たったの五年。それだけであいつは・・・」

どこか遠い目をしだしたちーちゃんは置いといて、刹くんも考えがまとまったらしく私を待っていた。

「ではでは～、発表どうぞ～」

「えっと、まあ簡単に言えば、シールドに回したエネルギーの余剰分を使って展開した翼って感じです。名称は”エナジーウイング”。理論とかの説明は後にしますけど、これは攻撃・防御・移動、この三つを同時に行うことができます」

「もう少し具体的に言ってくれ」

おやや、ちーちゃんが興味を示すなんて、ますます楽しみになってきたよ。

「そうですね、では防御からいきましょう。このエナジーウイングは、シールドに回したエネルギーの余剰分を使ってる為、その特性を持ってます。よってウイングは物理攻撃を逸らしたり、ビーム兵

器を跳ね返すこともできます。次に移動ですが、全身を覆うようにすることで空気抵抗などを受け流し、理論的には亜光速での機動性と運動性を確保できます。最後に攻撃ですが、このウイングの特性を攻撃に転換して、刃状の粒子の砲撃を羽のように放てます」

すごいすごいすご～い！今さっき思いついたとは思えないほどの完成度。シールドに回すエネルギーでどうしても発生しちゃう余剰分を上手く使うなんて、全然思いつかなかったな。
ほんと、ここまで考える事ができてまだ十五歳とか、絶対間違ってるよね。

「いろいろ細かい所は、追々煮詰めてくことになるんですけどって、束さん聞いてます？」

「うん、大丈夫聞いてるよ。いやはや、やっぱり刹くんの発想は面白いね。束さんをここまで驚かせるなんて～憎いね～～」

「そんな、俺なんてまだまだですよ。これだってあの時の知識から拾って今どうにか形にしただけですし」

「謙遜なんてする必要はないよ。君の知識は君の物、他の誰の物でもない。それを君が使って何が悪い、いや悪くないよ」

〈そうよ、刹那の知識は例え彼女から贈られた物だとしても、すでに刹那の中にある。ならそれは刹那の物に決まってるじゃない〉

「そうだけど・・・・・・」

「うじうじ考えるな。あるモノはあるのだから仕方あるまい？もう割り切ったほうがいいぞ」

「う～、そう言うならそうします」

刹くんも色々と納得？したことだし、あとでドラグーンのさらなる改良案と、エナジーウイングについての資料もらっとこ。
久々に徹夜しちゃうかも知んないな～。
最近してないからだいじょぶかな？だいじょぶだよね、私？

＜ＳＩＤＥ：ＥＮＤ＞

＜ＳＩＤＥ：刹那＞

「それじゃあ、今日はそろそろ終わろうか？」

「そうだな、私も色々準備しないといけない時期だからな」

千冬さんが準備を始めるってことはＩＳ学園かな？
確か今は入学試験をやってるんだっけ。
じゃあ、俺も準備しないと。
いくら姉さんに無理矢理入れられたとしても、決まったのだから腹をくくるしかない。

「刹くん」

「なんですか？束さん」

「あとで今日の模擬戦で感じたことと、ドラグーンの詳しい感想、あとエナジーウイングについての詳細を送っといてくれる？私も今日から忙しくて、取りに行く暇無いんだよね」

「わかりました。あとで送っときます」

「ではバイビー」

そう言って束さんは来た時と同じくずどどどど・・・・・と、もの凄い速さで走っていった。
束さんを呆れた目で見送っていると後ろから千冬さんに声をかけられた。

「全く慌ただしいやつだ。刹那、送ってやるから支度しろ」

「はい」

千冬さんに言われ俺は少し急いで着替えを終えた。
ISスーツを綺麗にたたんで持ってきたバックの中に入れて準備完了。

「準備できました」

「分かった。いくぞ」

こうして俺の慌ただしい春休みは終わっていった。
ただ俺は忘れていた。この濃密すぎる生活のせいで、彼女にメールするのを。

後日、俺はそれを後悔することになる。
あの時忙しくとも一度くらい送っとけばよかったと。
そうすればこんな事にはならなかったのに、と。

だが神ではない俺にはそんな未来など知る由もなく、呑気にＩＳ学院を楽しみにしていた。

第六話　模擬戦の反省と新技術開発（後書き）

千冬も束も刹那に対して親愛以上の想いを抱いています。
ただ刹那は自分への恋愛感情にだけはそれなりに鈍感で気づいていませんが。

刹那の中にある知識については追々話していくことになります。それと、刹那が使っているＰＴはある作品からとっています。まあ、名前や武器は変えてないため分かりやすいと思いますが。これからも幾つか同じ作品から出していこうと思っています。なにかご希望がありましたら、どしどしください。詳しいことは活動報告にて。

お知らせ

読者の皆様、この度大変私事でありますがこの小説、『ＩＳ〈インフィニットストラトス〉天使降臨』の連載を中止させていただこうと思っています。

理由と申しましては、作者の技術不足と、見通しの甘さです。原作を読んで、アニメを見て面白そうという安易な理由で書き始めたこの作品ですが、構想をきちんと練らず行き当たりばったりでやってきたツケが来てしまいました。

このままでは読者の皆様の期待を裏切ってクオリティーの低い駄作となってしまう可能性が出てきたため大変申し訳ないのですが、連載を中止させていただきます。

ただ、季節の変わり目である今
心機一転をして、新たな作品、『ＩＳ〈インフィニットストラトス〉　赤と白の円舞曲』を執筆しようと思っています。

内容は今作を微妙に変え、尚且つ今作の今まで書いてきたイメージとあまりかけ離れないように心がけつつ、作っていこうと思いますので、応援の方をお願いいたします。

作者の身勝手な理由での連載中止、本当に申し訳ありません。

ではでは、次は新たな作品、『ＩＳ〈インフィニットストラトス〉
赤と白の円舞曲』で皆様をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3958n/

IS〈インフィニットストラトス〉天使降臨

2011年3月25日13時35分発行